

# 医療最前線

» vol.79

川崎医科大学総合医療センター  
内科



Report!

## 老年医学の視点と多職種連携で 要介護を防ぎ、健康を取り戻す

高齢者のさまざまな症状を、年齢のせいでは済ませない診療を。

二〇二〇年、川崎医科大学に県内初となる「総合老年医学」が新設された。当教室を率いる杉本教授は、同総合医療センター内科部長として、老年病や老年症候群を専門領域として診療している。「高齢になると、めまいやふらつき、転倒、倦怠感、低栄養など、さまざまな症状が現れます。それらを総じて老年症候群というのですが、いずれも原因はひとつではなく、臓器別の診療ではその特定や根本的な治療が難しいため、「年齢のせい」にされがち。当科では、患者さんの病気や社会的要素、家庭環境などから問題点を特定し、老年症候群を解決するため、看護師や薬剤師、管理栄養士、理学療法士をはじめとした多職種連携で治療にあたっています」と杉本教授は話す。

「老年症候群を放っておくと、生活機能が低下してQOL(生活の質)を阻害するようになり、健康寿命も損ないます。そのまま放っておくと、二年で約半数が要介護状態になることから、「フレイル(前要介護状態)」という概念が生まれました。クローズアップされるようになったのは、ここ二〇年ほどのことだが、フレイルであるかどうかの評価方法はすでに確立されており、タイミングを逃さず適切に対処すれば、要介護状態になるのを防げるだけでなく、健康な状態に戻ることも可能だという。ただし、フレイルの改善は、患者が医師の指導を受け入れ、生活のなかで実行でき

るかどうかは左右される。そのために杉本教授が心がけているのが、「今日は来てよかったと満足してもらえるまで、診察室から出さないつもりで患者さんが抱える疑問をすべて解決し、距離を近づけること。それがスムーズで確かな診療にもつながっている。」

杉本教授は「コロナ禍にある現在はフレイルを悪化させる環境が揃っている」とも話す。たとえば、感染の不安から外出を控えることで、運動や食事の量が不足しがちになり、さまざまな症状が現れる。その治療に老年医学的な視点があれば、複数の診療科で処方される対処療法が薬が増え、その副作用で別の症状が現れることさえあるのだ。それを軽減するため、たくさんの薬のなかから重複しているものなどを整理する、ポリファーマシー対策も行う。

二〇二三年度中には川崎医科大学高齢者医療センターが開院予定。開院後は、フレイル検診やその予防、そして、手術や病気の治療で急性期の病院などに入院していた高齢患者を受け入れ、運動や栄養の状態改善を図る「攻め」の管理も視野に入れる。さらに、老年医学の診療を理解する多職種の人材育成も目指す杉本教授。「将来的には、当教室の考えや診療方針を県内各地の医療施設に広めていきたい」と、目を輝かせた。

### Internal medicine



杉本教授がつねに真摯に患者の声に耳を傾けるのは、「その患者さんの医療上のことは、誰よりも自分が知っているという状況にしたい」から。



週1回行なう病棟ラウンド。看護師や理学療法士らとカンファレンスを行なった後、直近1週間に転倒などを起こした患者を回診。患者本人の話聞くのはもちろん、病室の環境まで念入りに確かめて、予防の対策をする。



「健常、フレイル、要介護、終末期それぞれに、適切な多職種アプローチを行なうことが求められます」と話す杉本教授は、気取りなく、話術も巧み。公認心理師、薬剤師をはじめ、さまざまな専門職と連携して日々患者に向き合っている。

小学2年生の時、ある仏像を見た瞬間に衝撃を受け、仏像を見るのが大好きになりました。子どものころはひとりバスに乗って、大人になってからは暇を見つけては全国各地に車を走らせています。運動は、足掛け30年くらいバレーボールを続けています。



杉本 研 教授  
Sugimoto Ken

■ 専門医  
日本内科学会総合内科専門医、  
日本老年医学会老年科専門医、  
日本糖尿病学会糖尿病専門医



2023年度に開院を予定している川崎医科大学高齢者医療センター(イメージ図)

お問合せ  
川崎医科大学総合医療センター  
岡山市北区山下2-2-61  
☎0862652111  
<https://g.kawasaki-m.ac.jp>

※写真は取材用に撮影したものです

■2022年4月25日号掲載  
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。